

Let's

仕事のかたち

会社説明会に行くたびに、採用者数の男女比にがくせんとします。総合職を希望していますが、女性の採用が、男性に比べて圧倒的に少ないんです。新卒の採用実績で、総合職200人中女性40人や、100人中10人しか採用しないのはざらです。なぜこんなに極端に、男女比が違うのですか？この状況は大手でも、中小でも変わらないです。どうしても納得いきません。

(中大5年
ひまわりさん)



大久保幸夫の キャリアスタート Q&A

まだ過渡期、政府も支援

確かに、総合職に占める女性の割合は約5%と言われてます。新卒採用時における男女の能力差は全くありませんから、あなたが「どうしても納得がいけない」と感じるのには当然だと思います。大卒女性が新卒で入社した会社で、第一子出産以降も残って勤務している比率は2〜3割です。そのため、女性には出産以降も見据えた長期の活躍が期待しづらいのではないかと考えて、企業は採用に力が入らないのでしょう。

備わってきた現在のところから、もっと女性総合職が採用されてしかるべきだと私も思います。それでも、男女雇用機会均等法が施行される以前の、女性門前払いされていた頃と比べたらだいぶ改善したのです。みなさんの先輩たちが総合職として活躍した結果、少ない比率ながらも女性の採用が着実に進んできたのだと思います。今は男女半々に採用される時代へ向けての途上段階なのでしょう。

ただ悪い話ばかりでもありません。政府は「2020年までに、すべての指導的立場における女性の比率を30%まで引き上げるよう期待する」と打ち出しました。企業も、女性管理職比率を早急に高めたいと考えています。

今のところ管理職に占める女性の割合は部長2・8%、課長5・1%、係長10・4% (厚生労働省「賃金構造基本統計調査」) ですから採用数も増えていくでしょうし、今後優秀な女性ほどどんどん管理職に登用されていくことになるでしょう。昇進では、同じ能力なら女性の方が有利、というところになるかもしれませんね。これは一種のチャンスです。これから総合職で入社する女性には、大きな期待が寄せられると思いますよ。

(リクルートワークス
研究所長)

【キャリアスタートQ&A】就職前の学生、仕事を始めて間もない若い方の、就職・仕事についての悩みに、専門家が温かく答えます。回答者はリクルートワークス研究所長大久保幸夫さん、キャリアカウンセラー小島貴子さんです。ご家族などの質問や、就活、仕事の話も歓迎です。質問は、〒104・8011 朝日新聞Let's編集部(住所は不要です)へ。ファクス03・5550・5114か、Eメールlets@asahi.comでも受け付けています。住所、氏名(匿名可)、電話番号を明記。採用者にはクオカードをお贈りします。

総合職女性、なぜ少ないの

募集中



蛍光管がカラフルなブロックに。右から久保さん、尾崎さん、中村さん=金沢市で

「売った蛍光管に責任を持つ」

ドラッグストアの店内を照らす蛍光管は1店あたり約500本。交換すればゴミになる厄介なものも2店を集めれば、大きなガラステールがでる。「使えるものは使う。それだけ」と創業30年の電気工事会社サワヤ(金沢市)の社長、尾崎東志郎さん(54)。4年前から、蛍光管のガラスのリサイクル事業に取り組んでいる。郊外にある工場に入ると、大小の蛍光管がサイズ別に台車に積み上げられている。1本ずつ表面の汚れをふき取って機械にセット、電極部分を切り取ってから割り、水銀と蛍光体を熱で取り除く。再生したガラスは薄氷のよう。「食器にも使える」が売り物だ。

リサイクルへの第一歩は98年。得意先から無料回収するサービスを始めたところ、蛍光管を割って埋める従来の方法では、中に含まれる微量の無機水銀が飛び散り、作業員も土壌も害する危険があると知った。ハンマーで300本も割ると息苦しくなると聞き、飛散の心配のない破砕機を購入すると、産廃処理の許可を取って事業化するよう市から勧められた。埋め立てをせず、資源として利用する道に乗り出したのは02年だ。廃棄される国内の蛍光管は年に4億本でリサイクル率は水銀で2

工房立ち上げ使い道も提案

再生ガラスが本場に利用できるのか。相談した先は、市が運営する工芸工房だ。ガラス工芸の研修生だった中村和安さん(37)は溶かした瞬間、「いける」と確信した。工芸用の原料に似て扱いやすい。初の試作品は裸電球の形の置物。細い気泡の入った淡い緑色のガラスに、次のヒントが封じ込められているような気がした。

サワヤは03年春、工場の隣に再生ガラスの工房を開いた。責任者は中村さんだ。試行錯誤の末、作

り上げたタイルや看板、家具などを展示即売し、新たな使い手を開拓する場にもなっている。一線のリサイクル事業部長の久保康博さん(45)は、「がけつづきを歩きながら、自らを奮い立たせる」という社長の言葉を覚えている。電気工事の世界では価格競争が厳しくなるばかり。ガラス片を熱処理して水銀を抜く装置は1億円を超え、大きな賭けだった。「子どもの結婚式より事業費を優先したし、自家用車は20年選手。でも走り出したらとまらなかつた」と尾崎さん。昔から現場でゴミをだすのが大嫌いだ。売った蛍光管に最後まで責任を持つとうと覚悟しました。装置に何度も手を加え、水銀をほぼ完全に除去できるまでに精度を上げた。

プロ
ふえつしよ
なるぞ

再生ガラスへの反応は、おもしろいほど二分する。「透明じゃないなんて」と冷やかなメーカーが多いなか、松徳硝子(東京都)の村松邦男さん(54)は今春、グラスやボウルのシリーズとして商品化した。「温かみのある風合いは、狙っても作れない魅力。成分の組成も均質

独言伝言

安全確認して食器にも

なので強度に問題ありません」。加工の前後に水銀の残留を検査し、安全性も確認している。滴をイメージした肉厚のデザインが、手になじむと好評だ。

大正期、電球づくりから出発したので蛍光管に「縁」を感じる。「環境への貢献なんて語る柄ではないが、私も社員も気持ちよく作って売れる商品。他にも名乗りを上げる作り手が増えてほしい」

文・長沢美津子
写真・伊ヶ崎忍